

「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断 下部消化管」

多田 正大・大川 清孝 編
三戸岡英樹・清水 誠治

九州大学大学院病態機能内科学

飯 田 三 雄

多田正大、大川清孝、三戸岡英樹、清水誠治の4氏によって執筆された「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断—下部消化管」がこのたび出版された。1年前に出版され、破格の売れ行きを示しているという「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断—上部消化管」の姉妹書である。本書も、以下のような理由から上部消化管編以上に好評を博することは間違いないと考える。

内視鏡、X線にかかわらず消化管の画像診断学を向上させるには、検討に耐えうる資料が揃った症例をできるだけ多数経験することに尽きる。その際、著者の序文にも書かれているように、1人の医者が自分で経験できる症例数は限られているので、他人の症例を見聞きすることが大切である。このような目的から全国各地で消化器関連の研究会が多数開催されており、著者らが常連の大阪の大腸疾患研究会や、東京の早期胃癌研究会もその1つである。これらの研究会では、1例1例についてX線、内視鏡、病理所見の対比が徹底的に討論され、診断力の向上に大いに役立っている。本書の執筆代表者、多田正大博士は、早期胃癌研究会の機関誌である雑誌「胃と腸」の編集委員長を長年務められた消化管診断学の権威者である。そのため、本書にも「胃と腸」誌の基本的な編集方針を随所に垣間見ることができ

る。すなわち、呈示された内視鏡写真はいずれも美しくシャープであり、また適宜挿入されているX線や病理などの内視鏡以外の画像もすべて良質なものが厳選されており、画像をみているだけでも楽しくなる。

本書は4章から構成されており、最初の2章で内視鏡検査に必要な局所解剖や正常内視鏡像などの基本的事項が述べられており、比較的経験の浅い内視鏡医にも理解しやすい内容となっている。そして、後半の2章では、腫瘍性および炎症性疾患別に、病変の種類、分類、鑑別診断のポイントが解説され、最後に内視鏡所見別に実際の症例が呈示されている。この症例呈示は全体の約2/3にあたる頁数が割かれており、本書の最重要部分と言える。1例が見開き2頁にわたって記載されており、左頁に2枚の内視鏡写真(大部分は電子内視鏡写真)とその所見の解説、右頁に診断名とともに、病理肉眼・組織所見や超音波内視鏡・X線所見など診断の根拠となる画像が示されている。しかもポピュラーな疾患から比較的まれな疾患まで多種類にわたる疾患が呈示されており、かなり経験を積んだ内視鏡医にとっても役立つ内容となっている。また、これから消化器内視鏡学会の認定医試験を受験予定の医師にとっても、左頁の内視鏡写真だけをみて所見や診

断の正否を試することができるように配慮されている。

本書では、原則として2頁で4症例が呈示され、右頁の端に疾患の解説がコンパクトに箇条書で記載されている。比較的ポピュラーな疾患であれば種々の内視鏡所見を呈し、何度も登場する。例えば、潰瘍性大腸炎をみると、発赤、アフタ様病変、全周性潰瘍・びらん、縦走潰瘍、不整形潰瘍、数石像、炎症性ポリープ、血管透見の消失ないし低下など15項目の所見について15例が呈示されているが、疾患の解説は重複がないように配慮されている。また、左頁の内視鏡写真とともに、腫瘍性疾患については病変の存在部位と大きさ、炎症性疾患については年齢、性、主訴が記載されており、内視鏡写真の読影を自身で試してみる際の参考となるように工夫されている。

このように、本書は、初心者からベテランに至るまでのすべての消化器内視鏡医にとって、大変参考になる必読の書である。カラー写真で埋め尽くされている割には価格も手頃であり、ぜひ講読されることをお勧めしたい。

●B5 頁208 2002 定価(本体12,000円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)